

物語の世界に入り込み
わくわく感を抱いて
読書に親しむ子を育てる国語科の指導

～他者に伝える活動を中心に据えた、
つながりのある単元構成の工夫を通して～

新城市立庭野小学校 石河 ゆかり

物語の世界に入り込み、わくわく感を抱いて読書
に親しむ子を育てる国語科の指導

～他者に伝える活動を中心に据えた、つながりの
ある単元構成の工夫を通して～



本校は、新城市の南部に位置する、全校児童34名の小規模校です。

学区には「三河の嵐山」と称される桜淵公園があり、春には清流豊川の両岸に桜が咲き乱れ、多くの人が観光に訪れています。さらに夏の緑、秋の紅葉など、四季それぞれの風情を楽しんでいただくこともできます。

昨年度、駐車場をはじめとする公園の整備が完了していますので、リニューアルした桜淵公園を楽しんでいただけるものと思います。

本校の子どもたちは、豊かな自然に囲まれ、地域の方々に温かく見守られながら、学年の垣根を超えてみんなが仲のよい関係を築くことができます。

子どもの実態①

読書の様子から



図書に関するアンケート

「本を読むことは好きですか」

はい …… 6人

いいえ…… 1人（児童A）

「どんな本が好きですか」

絵本 …… 2人

マンガ…… 2人 児童B

図鑑 …… 1人

ゲーム本… 1人 児童A

物語 …… 1人

本研究は、昨年度の2年生で行った実践を発表します。

はじめに、子どもたちの実態をお話します。

本学級の子どもたちは、何事にも興味をもって大胆に取り組むことができる、元気いっぱいの7人です。

子どもの実態①

読書の様子を見ると、子どもたちは物語をあまり好んで読んでいないことが分かりました。「ミッケ」や「大迷路」などゲーム感覚で楽しむ本を好む子が多く、子どもたちが手に取る本の選択肢の中に物語があまり登場しないことに気付きました。図書に関するアンケートからも、ご覧のような結果になっています。

子どもの実態②

好奇心旺盛・楽しいことが大好き

音読やみんなの前で発表することが大好き

どうして自由に
想像できる物語が好き
ではないんだろう？



子どもの実態②

好奇心旺盛で楽しいことが大好きな子どもたち。音読が好きで、物語を学習するときには、大きな声で本を読む姿が見られます。また、全校の前でも物怖じせず、笑顔で発表を楽しむ姿が見られます。

そのような元気印の7名が、文章から様々なことを自由に想像できる物語を好まないことに疑問を感じました。そして、これまでに物語の楽しさを味わった経験が少なかったのではないかと考えました。

図書室の様子

本の所有冊数が大変少ない

蔵書は年代が古いものが多い

本が探しにくい



「読書センター」としての学校図書館の機能・役割

- ・学校教育の一環として、すべての子どもに、本を選んで読む経験、読書に親しむきっかけを与える。
- ・子どもたちが、自由に好きな本を選び、静かに読みふける場を提供したり、様々な本を紹介したりして、読書の楽しさを伝える。

本校の図書室は、本の所有冊数も大変少なく、蔵書は年代が古いものも多いことから、子どもたちが手に取りたいと思う物語の本はあまりありませんでした。

よく見れば探していた本を見つけられますが、子どもだけでは探しにくい環境でした。当然、子どもたちが足繫く図書室に通う姿は見られませんでした。

「読書センター」としての学校図書館の機能・役割は、

～学校教育の一環として、すべての子どもに、本を選んで読む経験、読書に親しむきっかけを与える。

～子どもたちが、自由に好きな本を選び、静かに読みふける場を提供したり、様々な本を紹介したりして、読書の楽しさを伝える。

とあります。



そこで、子どもたちが、日常的に読書に親しめるように、授業を通して物語の楽しさを感じることが大切なのではないかと考えました。

まず、国語科の授業において、友達とかかわりながら登場人物の気持ちに寄り添うことで、物語の面白さを感じます。

次に、物語をおもしろいと感じることで、「もっと読みたい！」という思いを強めていきます。

さらに、読んでみたい本を求めて「図書室に行きたい！」という思いが生まれます。

最後に、子どもたちは物語の面白さを知り、それを伝えたいと思い、活動を広げていくのではないかと考えました。

めざす子ども像

- ・ もっと本（物語）を読みたい
という思いをもつ子
- ・ 読書に親しむ子



これらの子どもの実態や図書館の様子などから、
めざす子ども像を

「もっと本（物語）を読みたいという思いをもつ子」

「読書に親しむ子」

としました。

研究の仮説 1

☆物語単元を授業の工夫や発表する場を設定することで、物語の楽しさを味わうことができ、もっと本（物語）を読みたいという思いをもつことができるだろう。

手立て

ア 音読の工夫を取り入れる

イ 音読発表会を単元の発展に位置付け、物語単元を年間のカリキュラムの中で集中的に取り組む

研究の仮説 1

研究の仮説 2

- ☆ 図書室を利用したり，デザインしたりする機会を設定することで，図書館が身近なものとなり，読書に親しむことができるだろう。

手立て

- ア 市の図書館からまとめて本を借りる
- イ すのこで改造計画
- ウ ポップコンテスト
- エ ブックフェスティバル

研究の仮説 2

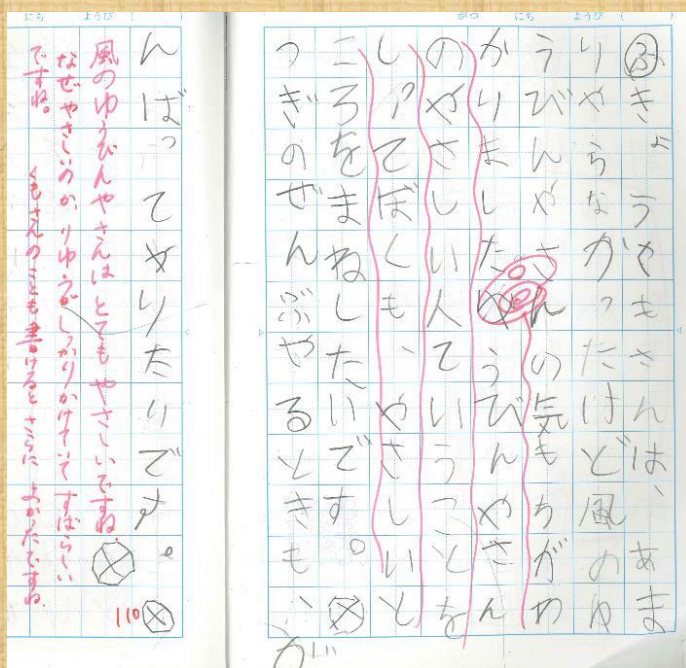


実践 1

もっと本（物語）を読みたいという
思いをもつことができるように

実践Ⅰ もっと物語を読みたいという思いをもつことが
できるように

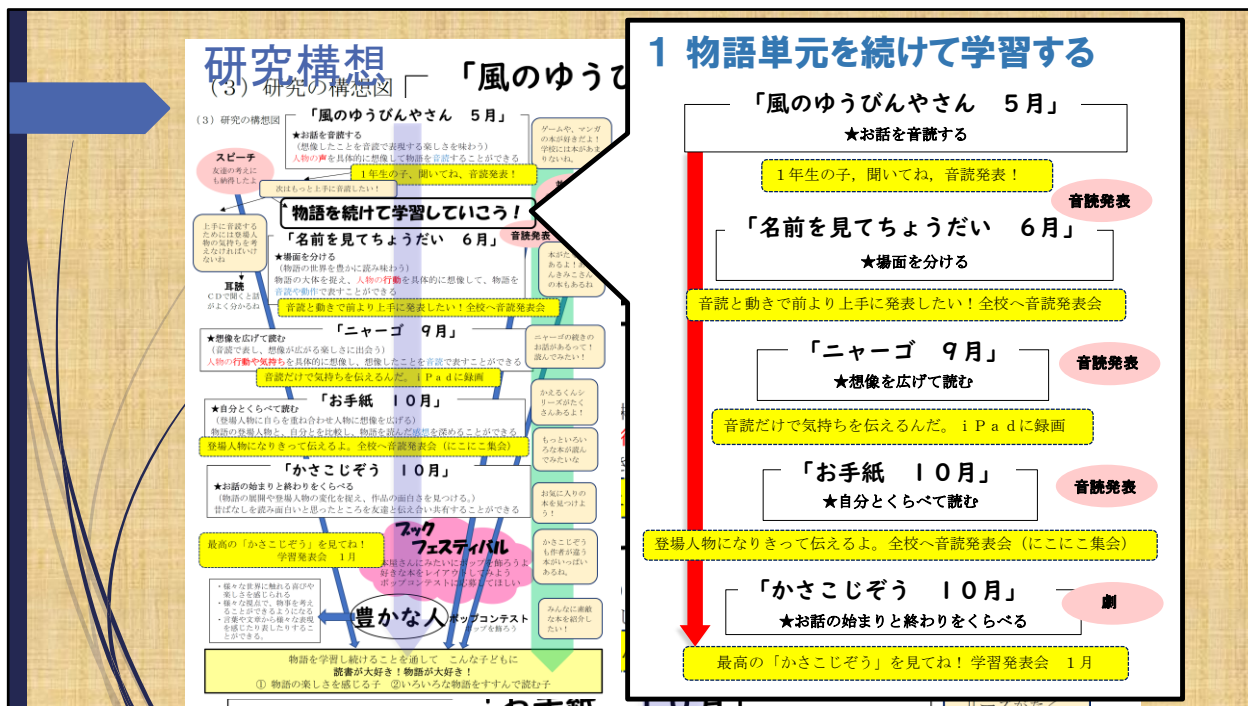
風のゆうびん屋さん



ふりかえり

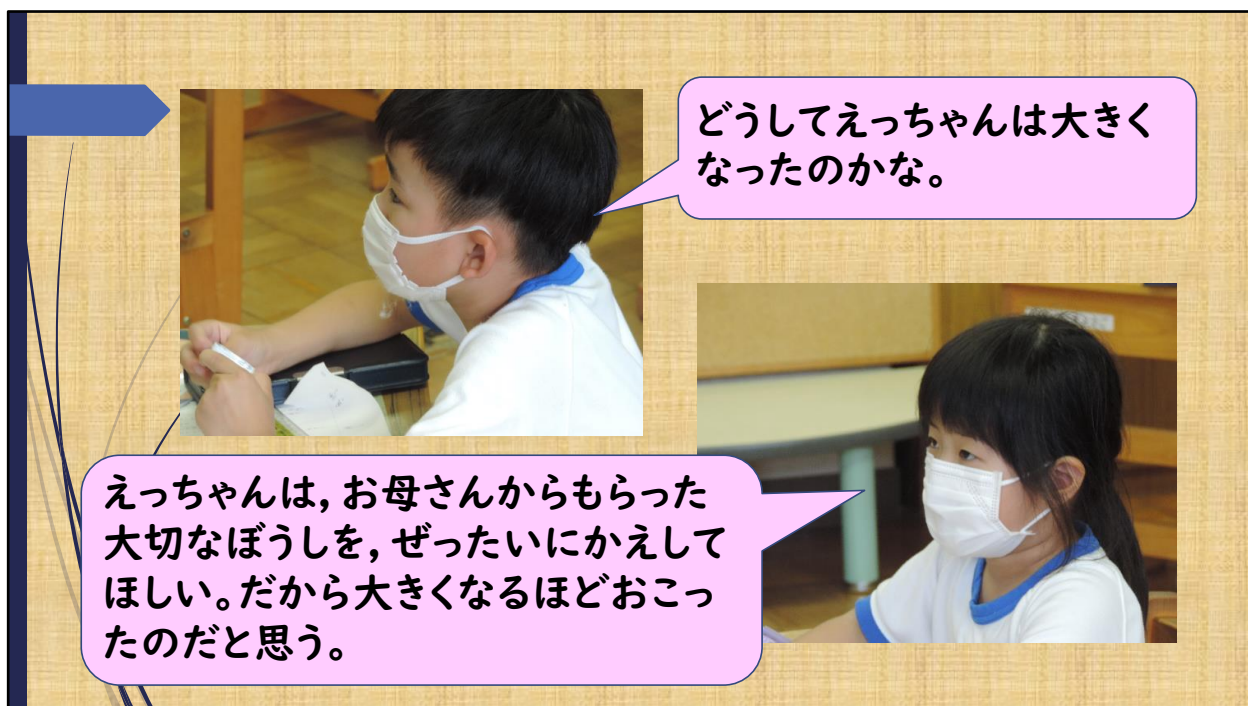
5月に、2年生になって初めての物語单元「風のゆうびん屋さん」の学習をしたとき学習の最後に、1年生に向けて音読発表会をしました。

子どもたちは、録画された自分たちの姿を見て、「もっと上手に発表したかった」と振り返りました。



次はもっと上手に音読発表をしたいという子どもたちの思いが高まり、すぐにでも次の物語を学習したい様子でした。

この思いを受け止め、物語单元を続けて学習をしていくことにしました。



6月に行った「名前を見てちょうだい」の授業では、音読発表会に向けて学習を続けていきました。

「どうしてえっちゃんは大きくなったのかな」というめあてで登場人物の気持ちを話し合いました。

授業の様子



それでは，登場人物の気持ちについて話し合ったときの授業の動画をご覧ください。



全場面の読み取りが終わり、いよいよ音読発表会に向けた活動が始まりました。

登場人物の様子を分かりやすく伝えるために小道具を作り、机やいすを引っ張り出して自主練習を始めました。

また、iPadを使って自分たちの音読しているところを録画し、友達同士アドバイスをし合っていました。

動作化を取り入れた音読発表会



音読発表会は全校児童と，たくさんの先生方の前で堂々とやり切ることができました。

動作化を取り入れた音読発表会



物語単位を続けて学習し，音読発表会に向けて登場人物の気持ちを十分に考えたことで，子どもたちは物語の面白さに気付くことができました



はやく次の音読
発表がしたいな



そして、はやく次の物語を学習し、音読発表会をもっと上手にやりたいという思いを強めていきました。



実践 2

図書室に行きたいという思いをもつ
ことができるように

実践 2

図書室に行きたいという思いをもつことができるように

市の図書館からまとめて本を借りる



市の図書館からまとめて本を借りる

市の図書館からまとめて本を借りる



たくさん本があるね

選ぶのが楽しいな



6月ごろ「名前を見てちょうだい」を学習していたタイミングに合わせて新城図書館から50冊ほど借りました。学習している物語だけでなく、子どもたちの読書の幅を広げるための並行読書を可能とするためです。

あまんきみこさんの著書をたくさん並べると、同じ登場人物や動物が他の本にも出てくるところを見つけた児童がいました。

お気に入りの本を見つけたよ!



子どもたちは教室の近くにたくさんの物語の本があることで、ちょっとした授業の隙間時間に気軽に本を手に取り読むことができたのだと思います。

お気に入りの本が増え、読書の楽しさが少しずつ子どもたちに浸透していったように感じました。

すのこで改造計画

こうすれば見やすいよ



本屋さんのようにレイアウトしたいな

市の図書館から借りたたくさん本を、埋もれることなく子どもたちの目に留まるようにしたかったのですが、背表紙しか見えない本は、なかなか手に取りませんでした。

「どこに何の本があるのか分からないね。」

「こうすれば見やすいよ」

「本屋さんみたいにしたいんだけど……」

と、子どもたちは本を並び替え始めました。



小さなすのこをいくつか用意すると，子どもたちは，すのこをひっくり返して本をレイアウトし始めました。



廊下に置かれたすのこのプチ図書コーナーは、そこを通る他学年の児童の目にも留まるようになりました。

ここで本を読むと楽しいね
みんなにも知らせたいな



子どもたちは、全校のみんなに自分たちの作った図書コーナーを見てもらいたい、自分たちが感じた物語の面白さを伝えていきたいという思いが出てきたようでした。

ポップコンテスト

好きな本を選んでポップにしたよ!



ポップコンテストに挑戦

隣の3年生教室の廊下には、本と共にポップが掲示してありました。

「ポップはその本を読みたいと思ってもらうものだよ。」

と説明をすると、

「ぼくたちもやりたい!」

と言いました。

ポップコンテスト

好きな本を選んでポップにしたよ！



いちばんお気に入りの本をポップに書くために、これまで絵本やゲーム本を好んできた児童が、

「ぼくは銭天堂の4巻が好きなんだよ。」

と、シリーズ物のミステリー系小説を選んだことには驚きました。

ポップをお気に入りの本の近くにレイアウト



ポップが完成すると

「早く飾ろうよ，先生すのこに貼ってもいい？」

と，さっそく出来上がったポップを本の横に貼りました。

プチ図書コーナーのできあがり！



ポップを書く活動をとおして、楽しみながら好きな本を選び、本をじっくり味わいながら読むことができました。

また、児童の一人は

「ぼくのポップを見て、みんなが本を好きになってくれるといいな」

という願いを込めて書いていたことも分かりました。

プチ図書コーナーのできあがり！



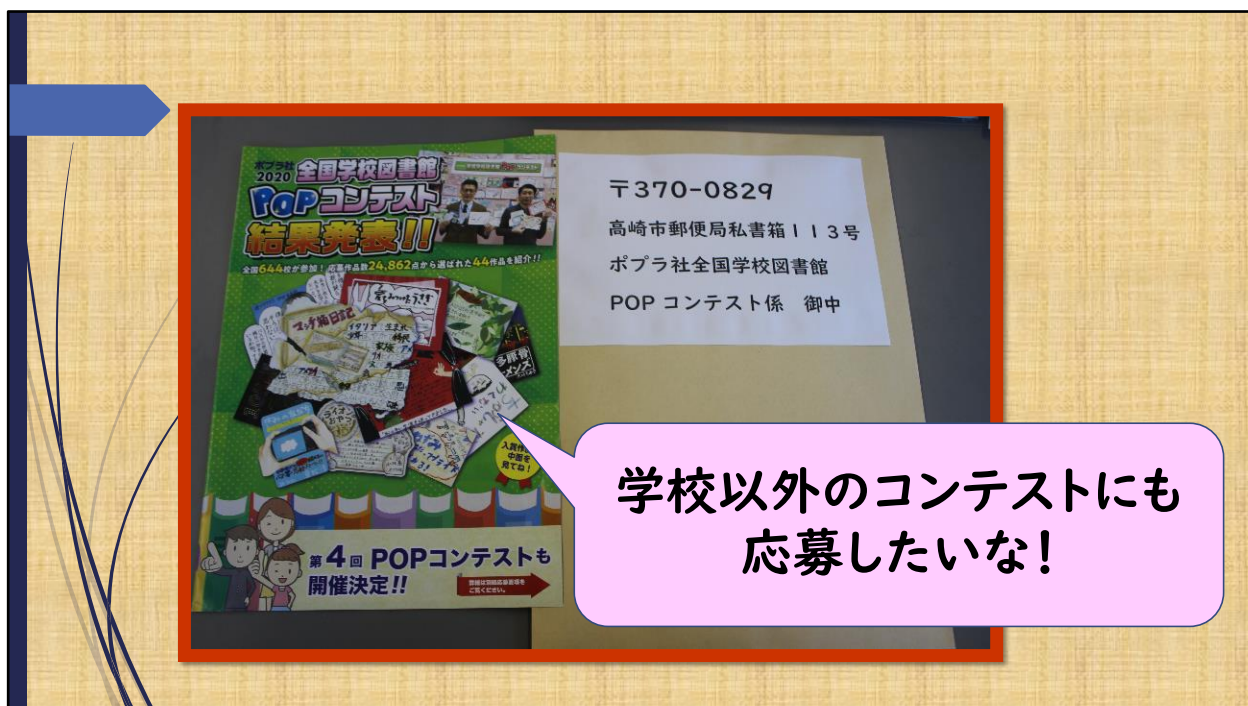
廊下にはまるで絵本屋さんのような、手作りの温かい
プチ図書コーナーが出来上がりました。



さらに、ポプラ社による「ポップコンテスト」があることも分かり、子どもたちに伝えたところ、

「ぜったいやりたい！」

と、口々に言いました。



子どもたちが思いを込めて描いたポップです。せっかくの機会なので、応募しました。

ブックフェスティバルを開こう



ブックフェスティバルを開こう

すのこにレイアウトした
お気に入りの本たち



お気に入り本の横にポップを飾ったことで、子どもたちにとって本がさらに特別なものになっていきました。

みんなでブックフェスティバルの準備をしよう



レイアウトも考えよう!

そして、全校へ向けてブックフェスティバルを開くことになりました。

手作りの紙芝居コーナー



子どもたちは看板作成に使った段ボールの残りを利用して，紙芝居用の台を作り始めました。



「ぼたもちを食ったほとけさま」という昔話を上演することになりました。

また、これまで何度か全校の友達の前で音読発表会をしてきたので、きっと上手に発表ができるのではないかと感じました。

ブックフェスティバルの宣伝をしよう



ブックフェスティバルに向けて、１年生に招待状を渡したり、先生方にも直接チラシを渡しに行ったりしました。

招待状を渡すよ!



自由に選んで読んでね!



すのこの本棚から自由に手に取れる本を選んでもらい、
ほっとくつろぎながら読めるコーナーも設置しました。

気軽に読める
ほっとくつろげるコーナー



いよいよ、ブックフェスティバル・ファイナル!

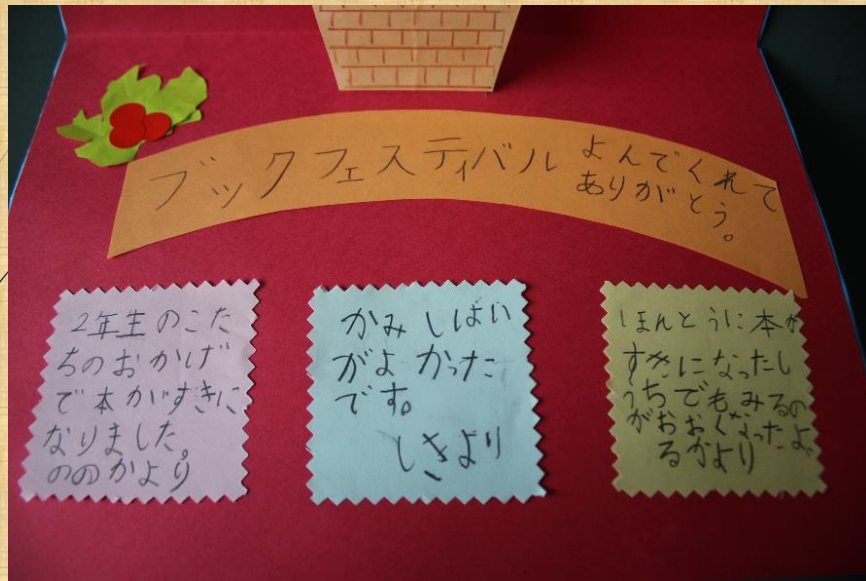


いよいよ、ブックフェスティバル・ファイナルを迎えることになりました。



紙芝居は練習どおり，登場人物になりきって演じることができ，子どもたちはやりきった満足感でいっぱいの様子でした。

1年生からのお礼のカード



1年生からもらったお礼のカードには、本が好きになった、家でも本を見ることが多くなったと書かれていました。

「本を好きになってくれて嬉しかったし、ポップも頑張って書いて良かったです。」

と、子どもたちはふり返りました。

ブックフェスティバルを開いたことで、子どもたち自身が読書の楽しさを実感することができたのだと感じました。

さらに、来てくれる人のことを考えた音読発表会の練習をしたり、環境を整える活動をしたりしたことで、人に喜んでもらえるという喜びや、「本を好きになっても

らう」という目標を達成する充実感を味わうことができました。

成果

- ・ 音読を取り入れることで、物語の楽しさを味わうことができた。
- ・ 音読発表会や劇を位置付けたことで、学習したことの成就感を味わうことができた。
- ・ 物語単元を続けて学習することで、物語への興味関心を高めることができた。

物語単元の授業で音読を取り入れることで、子どもたちは実感を得ながら登場人物の心情を読み取り、物語の楽しさを味わうことができました。

単元の発展として音読発表会や劇を位置付けたことで、学習に主体的に取り組む、学習したことの成就感を味わうことができました。

また、年間のカリキュラムから物語単元を選び、続けて学習することで、子どもたちは音読の楽しさを味わい、物語への興味関心を高めることができました。

成果

- ・市の図書館を活用することで、読書の幅が広がり、自分から手に取る姿が見られた。
- ・お気に入りの本をすのこに飾ることで、図書室が身近なものとなった。
- ・お気に入りの本のポップをつくることで、本を何度も読み返す姿が見られた。
- ・ブックフェスティバルで全校の児童に発表することで、読書に親しむきっかけとなった。
- ・ブックフェスティバルを終えて（動画）

市の図書館を利用したり、デザインしたりする機会を設定することで、図書室が身近なものとなり、読書に親しむことができました。

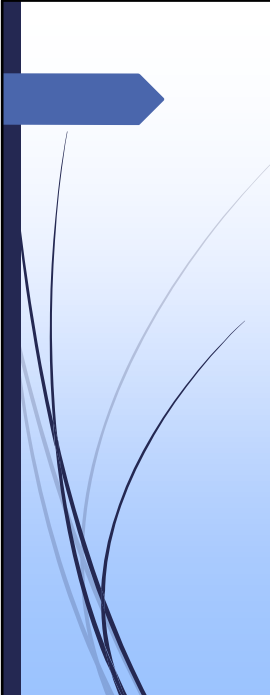
市の図書館から物語の本を借りることで、読書の幅が広がり、わずかな時間にも本を手に取る姿が見られました。

お気に入りの本をすのこのマガジンラックに飾ることで、自分たちでプチ図書コーナーを作成し、様々な本を手にとったり、図書室が身近なものとなったりしました。

子どもたちは、お気に入りの本のポップをつくることで、自分のお気に入りの本を他の人にも読んでもらいたいと思い、本を何度も読み返す姿が見られました。

ブックフェスティバルでお気に入りの物語を紙芝居で

発表することで、物語の世界をみんなで再現し聞き手に伝えたことで、全校の児童が読書に親しむきっかけを与えることができました。



課題

- ・ 学校図書館の充実
- ・ 市の図書館との連携

課題

- ・ 学校図書館の充実

今回の実践を通して、子どもたちの手の届くところに、興味をひく本がある環境はとても大切だと感じました。学校の規模や予算など、様々なことを考えれば限界があるのかもしれませんが、子どもたちが純粋に「図書室で本を読みたい」と思う気持ちに応えられる学校の図書室を目指したいと思っています。

- ・ 市の図書館との連携

本校をはじめとした小規模校は特に、市の図書館との連携は必要不可欠になってくると感じました。しかし、あまり活用できていない現状があります。今後も市の図書館との連携をし、子どもたちに魅力ある本に触れさせていきたいと思っています。



ご清聴 ありがとうございました

以上で発表を終わります。

ご清聴ありがとうございました。

